

集結。復員船にて同年六月二十日仙崎港に上陸、軍隊生活に幕を引き（復員）我が家へと帰りました。

思い起こせば数度の激戦に陣頭に立って敵に遭遇し、二度も三度も生死の境、紙一重のところになりながらよくぞ生還したものだ、不思議です。我が家の門に立ち、口から出た最初の言葉は母を呼ぶ声でした。

兄嫁と妹が迎えてくれ、母は前年三月に亡くなり「芳郎の顔が見たい」が最期の言葉だったとの事。私は暫く茫然と佇んでいました。そして兄はフィリピンで戦死との事。

私は思った、二度と戦争はしては駄目だ。平和の尊さや有り難さを子や孫に次世代の人々に語り伝えることが戦争体験者に科せられた義務である。そして戦没者の御冥福をお祈り申し上げます。三拝、合掌。

北支より中支へ

極寒の夜行軍

山形県 鈴木清一

私は、大正十三（一九二四）年三月三十日、山形県西置賜郡飯豊町で、農家の六人兄弟の長男として生まれました。徴兵検査は昭和十九（一九四四）年で第一乙種合格でした。

昭和十九年九月五日、山形東部第五十九部隊へ現役入営しました。

その当時の私の家庭の構成は

父	健康	農業（二町歩）	山林
母	〃	〃	〃
本人	〃	〃	〃
妻	〃	〃	〃
姉	〃	結婚して他家へ	〃
二男	〃	農業	〃

三男 〃 学生

四男 〃 〃

五男 〃 〃

とのことで、私が兵役のため家庭を出る事には大した障害もなく、後顧の憂いなく男児の本懐として勇躍入営しました。

その当時の日本の情勢は、日支事変の決着も見ぬままに勃発した大東亜戦争は、緒戦の勝利は束の間、次第に皇軍に不利となり、南方の制空、制海権は米軍の手に奪われ、日本軍は後退の一途に転じました。このような戦局危急存亡の秋、私共は祖国日本悠久の繁栄を願って、昭和十九年九月五日、山形東部第五十九部隊第八中队山口隊へ現役入営、初年兵教育を受け一期の検閲を無事に終了しました。

回顧すれば、入営前在郷時代さんざん隊内の内務班の生活のきびしさ、制裁の苦しさを予備知識として耳にたこの出る程聞かされていましたが、私共は入隊の以前より個人制裁の禁止が厳重に叫ばれていて、私共はその恩恵を蒙り大変ラッキーでした。とは言え、全

然皆無ではなく伝統の足を開け、眼鏡を外せ、歯を食いしばれ、その上痛烈な鉄拳制裁、初年兵同士の対抗ビンタ等は数回受けました。でも時代の移り変わりか、我慢できる程度でまあまあ、やれやれでした。

食事は良好で、ひとまず辛抱できる程度でした。しかし教育訓練はきびしかった。朝から夕方まで毎日大変であったが、若さ、何くその根性、郷党家族の声援を心のバネにして、どうにか頑張り抜き一等兵に進み、戦友と顔を見合わせて、お互いの健闘、武運を祝福したものです。

やがて、弾第一二〇一八部隊（第四十七師団歩兵第九十一連隊、昭和十九年七月新編成、中支）の要員となり山形を出発、夜行軍で尾花沢（約四〇キロ北方）演習場廠舎に到着、同地で弾第一二〇一八部隊第三大隊（村山大隊）第八中队に編入されました。いよいよ野戦要員である。慌ただしい朝夕の準備を見事のりこえ、三種混合の予防接種を受け、残留者のサーブिसを受け、くすぐったいムードを思い起こします。

さて、昭和十九年十一月二十八日、中支派遣命令を受け、大石田駅を出発、日本海沿線を経由して下関港に至る。釜山上陸後、防寒服に衣替えをして貨車輸送。車の床には、馬にやる干し草の束にしたものをベッド代わりに敷いて良い感じでした。列車は一路北上し、鮮満国境の安東、満支国境の山海関を通過し、昭和二十年の正月、順徳（河北省石家荘の南方）で新年を迎えました。

しかし、目的地は遙か南の中支湖南省湘潭である（長沙の南方約八〇〜一〇〇キロ）。目的地まで行軍とか。米空軍の制空下である。しかも極寒の時季の夜行軍、我れながらよく頑張ったと思います。北支の順徳と中支の湘潭との間は、図上約一二〇〇キロの直距離である。実際に行軍して歩いた分は、おそらく一五〇〇キロ以上だろう。私の労苦物語りの核心は、この行軍であり、寒中行軍です。

第一に、敵飛行機の制圧下である。最初昼間、順徳を出発して間もなく、敵機の空襲を受けました。残念にも戦死、負傷、それぞれ若干人の損害。飛行機はこ

わい。昼行軍は駄目で、夜行軍に切り替える。

昼は敵機に見付からないよう建物内、森林内等にかくれて日没と共に出発です。電気、電灯なし。タバコの火も駄目。もう一寸先も見えぬ暗闇の中を直前の兵にくつつくようにして行く。途中居眠りをしながら歩く者もいます。

それが小道から踏み外して水溜りや川、崖下へ落ちる。その度分隊長や先任上等兵はもう大変。部下をしっかりと掌握していなくて行方不明者を出すと、その分隊全員の責任となるからです。

真っ暗の夜間、鼻先や下アゴにツララをくつつけての極寒、戦友を助け合つての悪戦苦闘は語りつくせないもの。語っても体験者でないと分からない。

この非常な体験によって結ばれた戦友愛、苦業生死を共にした者の強い絆が、戦後約六十年を迎えても固い団結を保つ源であろうと思います。また、八十歳前後まで長生きした人生の不撓不屈の精神。戦後の荒廃した祖国を復興再建して世界一の経済大国を実現し、平和と繁栄の生活に恵まれた姿を考えると、若い頃大

陸の戦場での労苦の賜物と思ひ到ります。

さて、敵機の攻撃をくぐり行軍する。あまりの寒さのため、凍傷患者が続出、重症者は入院となります。鼻、口、その他にツララをぶら下げて歩く。右手は銃を持っているので、左手であちらこちら摩擦しながら凍傷を予防する。これ以上ない悪い条件の中で、食料のみは不自由なだったので助かりました。

連日の行軍で輜重隊の古参兵の中からも落伍者が出る始末で騎馬隊の引馬を命ぜられる。これが大変有り難いことになり、本当に助かりました。馬の尻尾につかまって、馬に引っ張られて行軍する。落伍者の装具等は馬の背中へあげる。

また夜中小休止で居眠りをして事故になる。その居眠り防止策の一つとして、各自の水筒の中へチャンチュウ（中国酒）を入れて携行し、小休止の時チュウを少し呑む。その内に武漢三鎮を通過して湘潭に到着。将兵一同ヤレヤレ御苦労さん！ 私も何とか部隊の一員として到着。その嬉しかったこと。

同地で中支派遣軍示威部隊独立警備歩兵第十二大隊第四中隊結城隊に編入となりました。

前任の警備隊との交替のため長沙方面へ転進。昭和二十年五月七日より田心橋付近の警備、楓樹河付近の警備に従事しました。この間小規模の討伐が二回あり、私も参加しましたが友軍には損害はありませんでした。

戦局は悪化の極に至り、食料や武器の補充もままならぬ状態になり、現地の民間人より食料調達を受けます。引続き警備中に終戦。正に青天の霹靂。虚脱状態が続きました。

やがて長沙へ集結。抑留され、続いて武装解除を受けました。この解除は二段階に分けられ、第一回目は各自小銃と三〇発の弾丸を持たされ、中国軍の要請により、八路軍の監視、防備にあたる。

その後、中国軍指揮下に入り、軍公路補修作業等の使役に服しました。この間第二回目の最終の武装解除を受けました。

その後帰国を許されて岳州へ移動集結しました。軍

紀風紀を厳正にした部隊より早い順番に日本へ帰すの方針とかを知り、東北健児の名誉にかけて、お互いに自粛自戒、よく団結して帰国を待ったのです。

その後岳州より乗船、揚子江を下り、中国軍に護衛されて南京へ上陸。鉄路上海に至りました。

昭和二十一年六月二十六日、無事日本内地の佐世保に上陸復員を果たしました。

陸軍上等兵の階級に進んだのは、二十八日でした。中国に従軍中、マラリアで三日熱を患いました。

ちょうど幸いに衛生兵より特效薬をもらって服用、大事に至らず良かった。復員後一回再発しましたが大したこともなく家族一同も安心しました。また他の部隊では、例外的にあったと聞く戦犯にも関係なく、正々堂々の帰国でした。

私は農家の長男として生まれましたので、結婚は早くて昭和十九年四月のことでした。農家必需の労働力確保のためであったのでしょう。子供は復員後、男一人、女一人を設け、孫は四人できました。

復員後、夫婦相協力して家業の農業に従事、食料増産に励み現在に至っています。

戦後の激変する世相を見て、心はゆれ動き迷うことも多い。懐かしい戦友と会を持ってつきぬ話をし、励まし合います。そうして祖国の繁栄を見ずして大陸に若い血を流して散った戦友の御霊を弔うことを日々忘れていません。

以上、下手な言い方で十分な表現ができぬのを我ながら残念に思いつつ、私の従軍中の苦勞話を申し述べました。私の苦勞のハイライトは即！ 順徳から湘潭までの行軍の苦しみであります。

古人曰く「玉磨かざれば光なし」人も困苦欠乏にたえて、白立してこそ真の人生でありましょう。恩欠会員の皆さんの御健勝御多幸を祈り上げます。